東海道中栗毛弥次馬

館蔵
浮世絵
版画展

笑える話に
絵がいっぱい

弥次さん
北さん
の旅

2021.1.3(日)~2.28(日)

新居関所史料館

開催にあたって

享和2年（1802）、十返舎一九の「東海道中膝栗毛」が出版されると、瞬く間にベストセラーとなり、次から次へと続編が出版されました。弥次郎兵衛と北八のコンビが東海道を旅しながら繰り広げる滑稽な内容が、話題性を呼んだのでしょう。一九の「東海道中膝栗毛」が、後の読み本や浮世絵など、数多くの作品に大きな影響を与えたことはよく知られています。浮世絵師として有名な歌川広重も膝栗毛にちなんだ作品を残しています。

そして今回紹介する「東海道中栗毛弥次馬」もその一つです。幕末から明治にかけて人気のあった戯作者の仮名垣魯文が新たに文を書き、落合芳幾が絵を描いたものです。一九の「東海道中膝栗毛」とは一味違った弥次さん・北さんの旅を紹介します。

凡　例

1　本書は、令和３年１月３日㈰から２月28日㈰まで、新居関所史料館で開催する館蔵浮世絵版画展「東海道中栗毛弥次馬　弥次さん・北さんのの旅」の展示解説図録です。

2　図録番号は陳列番号と一致しますが、陳列の順序は必ずしも番号通りではありません。

3　解説文は、作品中の文をもとに絵の内容をわかりやすくまとめました。

東海道中膝栗毛（とうかいどうちゅうひざくりげ）

「東海道中膝栗毛」は江戸時代後期の戯作者（げさくしゃ）十返舎一九の代表作で、主人公である弥次郎兵衛と北八の二人が伊勢詣でを思い立ち、数々の失敗や滑稽（こっけい）を繰り返しながら、東海道を江戸から京、大坂を旅する様子を狂歌や小咄（こばなし）を交えながら描いた作品です。

享和2年（1802）に出版された当初は、品川から箱根までで完結するようでしたが、あまりにも人気が出たため、その後文化6年（1809）までに伊勢参宮、さらにそこから京都、大坂見物を行う全八編が出版されました。そして、文化11年（1814）に本来なら最初に説明されるはずの弥次さん、北さんが旅に出るきっかけとなる発端編が出版され、合計18冊、13年間にわたり刊行されました。

この間の文化7年には八編の刊行に続いて金毘羅参詣の続編が刊行されたのをはじめ、その後も宮島参詣、木曽街道、善光寺道中の続編が出版され、膝栗毛シリーズは21年間にわたりロングセラーとなりました。

十辺舎一九（じっぺんしゃいっく）

明和2年（1765）―天保2年（1831）8月

十返舎一九は、明和2年に駿府（静岡市）の下級武士の子として生まれました。若いころ江戸に出て武家奉公をしますが、長くは続かなかったようです。その後、大坂で浄瑠璃作者となったあと再び江戸に出て、出版業者の蔦屋重三郎のもとで出版の仕事を手伝ううちに戯作の道に入りました。

寛政7年（1795）に三作の黄表紙を刊行したのを手始めに、以後多くの黄表紙、洒落本などを刊行しました。そして享和2年（1802）、38歳の時に「東海道中膝栗毛」を出版し、戯作者としての世評を確立するにいたったのです。辞世の句は「この世をば　どりゃ　おいとまに線香の煙とともに　灰左様なら」と、いかにも一九らしい句を残しています。

東海道中栗毛弥次馬

文・仮名垣魯文　画・一恵斎芳幾　板元・品川屋久助板

万延元年（１８６０）刊

東海道を江戸から京都へ旅をする弥次郎兵衛と北八の両名が、各宿場で繰り広げるエピソードを滑稽に描いた作品。十返舎一九の「東海道中膝栗毛」の影響を受けた戯作者の仮名垣魯文が、原作にはないエピソードを脚色し、落合芳幾が絵を描いています。一九の「東海道中膝栗毛」は読み物として書かれ、関連する絵が挿絵として描かれています。それに比べこの栗毛弥次馬は、仮名垣魯文が膝栗毛の滑稽さをより誇張し洒落っ気のある内容に書き改めるとともに、その文に合うような絵を落合芳幾が面白く描いており、読み物としてだけでなく見て楽しむ作品にもなっています。

この作品は、縦大判一枚に上下に図を描いています。そのため、それぞれに切り分けて鑑賞する事も出来たようで、実際切り分けられたと思われるものも残っています。

本作品と同じ「東海道中栗毛弥次馬」という標題の作品がほかに二種存在します。一つは、安政元年（１８５４）刊行の鈍亭（仮名垣）魯文が文を書き、一盛斎芳直画による上下2冊の合巻物、もう一つは文久元年（１８６１）刊行、岳亭春信の作で一恵斎芳幾画による初・二編2冊の合巻物で、いずれも絵が中心の絵双紙スタイルになっています。

なお、本作品は日本橋から京都までの56図に序文と発端・住家を含め全59図の続絵ですが、本館所蔵ではそのうち日本橋、品川、川崎、神奈川、吉原、蒲原　御油、三条大橋、京都の9図が欠けています。

仮名垣魯文

文政12年（１８２９）―明治27年（１８９４）11月

江戸末期から明治初頭にかけての戯作者、新聞記者。江戸の京橋生まれ。本名は野崎文蔵、字は能連、幼名兼吉、また庫七、後に文蔵と改めました。別号に鈍亭、金毛道人、猫々道人。花笠文京の門に入り、初め瓦版や流行歌などを書いていました。万延元年（１８６０）刊の「滑稽富士詣」は魯文が戯作者として認められた出世作で、十返舎一九の「東海道中膝栗毛」に倣いながら横浜の異国風俗を盛り込んだものでした。維新後は「西洋道中膝栗毛」や牛鍋屋を舞台にした「安愚楽鍋」を発表して流行作家になりました。一方、明治7年（１８７４）からは「横浜毎日新聞」の雑報記者となり、翌8年には自ら編集者として「仮名読新聞」（いろは新聞）などを創刊し、新聞記者としても活躍しました。

落合芳幾

天保4年（１８３３）―明治37年（１９０４）

幕末から明治にかけて活躍した浮世絵師。本姓は落合、俗称は幾次郎。号は一蕙斎（蕙斎）、一恵斎、朝霞楼、晒落斎など。芳幾は、猫やがいこつ、妖怪など奇抜な浮世絵で知られる歌川国芳の門人で、月岡芳年と並び称される存在でした。芳幾も歌川国芳の作風を受け継ぎ、魚を歌舞伎役者の似顔絵にした戯画や、影絵仕立ての役者絵のほか、武者絵、横浜絵、美人画など、様々なジャンルで奇抜な作品を制作しました。代表作に、芳年との競作である残酷絵「英名二十八衆句」や、影で描くという画期的な役者似顔絵シリーズ「真写月花乃姿」などがあります。また、明治時代には、東京日日新聞の新聞錦絵や、歌舞伎雑誌の創刊に携わるなど幅広い活動を行いました。

1 序文

【序文】　板元である当世堂の品川屋久助が、「東海道中栗毛弥次馬」の出版の経緯と作品への意気込みを述べています。東海道五十三次の宿場や駅路の滑稽を記し好評を博した十返舎一九の作品にちなみ、戯作者の仮名垣魯文が興味をそそる文を書き、それに絵師の一恵斎芳幾が筆を執った経緯が記されています。そして、この作品に続いて木曽道中六十九次、横浜遊覧、遊郭岩亀楼を題材にした続絵の出版計画も述べられています。

弥次馬に乗地の草のおさき身の
　こや妻乞の里の野きつね

2 発端　住家

【発端】　絵草子屋の幕前で、旅に出かける弥次さんと北八が合羽姿で、口上を述べている場面でしょう。十返舎一九の妙案の東海道中膝栗毛にちなみ、戯作者の仮名垣魯文が新たに書き下ろしたことで好評を得ること間違いなしと述べています。左上は、この作品で戯作を担当した仮名垣魯文による口上。

【住家】　膝栗毛では、弥次さんは神田八丁堀あたりに住む独身者で、北八はその居候という設定になっています。

　これは、出立に際し借金取りたちが押し寄せ、借金を払うよう申し立てている場面です。一晩に三度も借金の取り立てに来たものの、払ってくれないので居座るという米屋。また、一四か月も家賃を滞納されている大家が、今宵こそ全て勘定できなきゃ人をやり退去してもらうというと、弥次さんは、先口の米屋や酒屋のほうをかけあっているのでもうしばらくおまちをと答えます。旅立ち前の住家を払う際のやり取りが滑稽に描かれています。左端では、居候の北八がクモの巣のはった米びつをのぞき込んでいます。

3 程ヶ谷　戸塚

【保土ヶ谷】　保土ヶ谷に差し掛かった弥次さんと北八。馬子らがつかみあっている光景を目にします。あんな騒動を起こしていたら馬がどこかに逃げ出してしまうと弥次さん。あいつらも馬に撒かれるやつらだからよっぽど相手が悪い（馬のほうが賢い）と北八。すると弥次さんが、大方昼飯の代わりにでもするのだろうというと、北八がそれに答えて、さぞ旨かっただろう（馬が勝った）と洒落をいっています。そこで弥次さんの一首

馬の背をわけいかづちの高声に
ものいうたちのはてのいさかい

【戸塚】　二人は金細工を行う金工に出会います。どうやらその金工は、以前は江戸にいたらしく、弥次さんとも顔見知りでした。そこで弥次さんが銭を払うと、金工は大きな金玉の上にのせてチン、チンと叩き始めました。いまどき江戸へ金を持っていくと大金になると北八がいうと、弥次さんがこの金は大きすぎて歩くことができないから不通用だと大笑いしています。

4 藤沢　平塚

【藤沢】　藤沢の図では、宿屋で宴会を始めた弥次さんと北八が、拳酒（じゃんけんのもとになったという遊び。藤八拳、横浜拳、虫拳、ちょん立て拳などがあり、負けたものが酒を飲んだり服を脱いだりしました）に興じています。そのうち最近教わったという「ちょんなれ」を始めた二人。「ちょんなれ、ちょんなれ、ちょんちょん、なれなれ」と、お互い服を脱ぎ合っています。

さわらびのだしたこぶしのけんざけに
笑ひ上戸のはるのやまやま

【平塚】　茶屋で休憩する弥次さんと北八。話題は昨晩の宿屋での女性の話で盛り上がっています。北八の相手は不思議な縁で幼馴染みの女性だったらしく、弥次さんがよっぽどもてただろうというと、北八は「いや、もたれた」と答えます。そのわけを弥次さんがきくと、一夜泊りで可哀そうだからサツマイモを二百ばかり買ってやったら一人で食っちまったと。画中には、二人が食べている団子を狙っている犬がいます。

5 大磯　小田原

【大磯】　大磯では鴫焼（しぎやき）の店が描かれています。鴫焼とは焼いたナスに練り味噌をつけたものですが、鴫焼は大磯の名物ではありません。西行上人が鴫焼を始めたところだと、北八が知ったかぶりをすると、それは鴫立沢だと弥次さんがいいます。鴫立沢は昔、西行上人が諸国行脚のとき、鴫の立ち去るさまに秋の風情を感じ、歌を詠んだ場所とされています。北八が、大磯の名所である「鴫立沢」を「鴫焼沢」と間違えたようで、そこで「鴫」の名がつく物を登場させたのでしょう。

さいもなきぜんにあはれはしられけり
しぎやきなすのあきの夕めし

【小田原】　五右衛門風呂の入り方がわからなかったのか北八は、下駄を履いたまま入り、五右衛門風呂の底を踏み抜いてしまいます。他の客を入れることができないと宿屋の亭主からどうにかしてほしいと叱られてしまいます。北八があまり弥次さんに助けを求めますが、弥次さんは、意気地のない底抜けの野郎だと大笑い。これは一九の「東海道中膝栗毛」にも登場する有名な場面です。

やどやのていしゅしりをよごした
すへふろのかまをぬきたるとがゆえに

6 箱根　三島

【箱根】　小田原で宿を勧める留女を振り切り、箱根の山道を行く弥次さんと北八。すると弥次さんの脇差の尻を掴まえて一人の男が声をかけました。提灯の火影に映った姿がいかにも山賊のようでびっくりする二人。弥次さんがアッと叫び提灯を投げ出し逃げようとすると、北八もそれにつられて逃げようとしますが木の根につまずき転んでしまいました。少しばかりですがありったけの路用を差し上げます、必要なら褌も解きますので助けてくださいと懇願する弥次さんでしたが、実は男は大道役者で、ただ明かりを分けてもらおうと声をかけたのでした。

【三島】　旅籠で就寝中、北八の布団に何かが入ってきました。すると弥次さんが何かに食いつかれたと騒ぎ出します。その騒ぎに驚いた飯盛女が地震と勘違いし、すぐに逃げましょうといいます。布団を抜け出した北八が、痛がる弥次さんを見てしっかりしろといって、弥次さんを助けに向かいますが、当の北八自身は恐怖のあまり腰が立たなくなっています。どうやら二人が持ち込んだすっぽんに弥次さんが噛まれて大騒ぎになり、その騒ぎにまぎれてゴマの灰に財布を盗まれてしまいます。これも一九の「東海道中膝栗毛」に登場する有名な場面です。

どさくさにさいふさらってすっぽんと
にげだすごまのはいさようなら

7 沼津　原の駅

【沼津】　どういうわけか北八が大釜に落ちて釜が割れてしまいました。北八は、弥次さんに起こしてもらおうとしますが、自分から好きで釜に入ったのだから、こちとらかまやしないと、弥次さんが答えます。大釜の仕丁が言うことには、この釜は源頼朝公の富士の巻狩りに際し炊き出しをした由緒あるものでした。この話は、司馬温公の逸話を引き合いにしたものです。司馬温公は中国の北宋時代の政治家で、幼少のころ大きな瓶に落ちた友人を助けるため叱られることを覚悟で瓶を割ったというものですが、北八は戯れて釜に入って割ってしまったのです。

たわむれに入たることがわれがまの
しりからもれし身をいかにせん

【原】　原の宿場で客引きをする留女に呼び止められる弥次さんと北八。店の中から二人に声をかける女性がいます。しかし、女性の器量を見るなり「あっかんべー」をしながら立ち去る二人が描かれています。留女のなかには旅人の着物の衿首をつかんだり荷物をつかむなど、少々強引な客引きを行うものもいて、街道の風物詩の一つでした。

旅人に膳をすえたるめし盛の
顔は杓子に似たりよったり

8 由井　興津

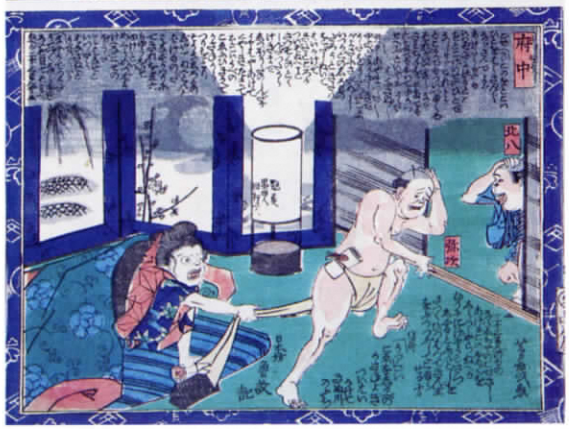
【由比】　由比の薩埵峠でしょうか、富士山を望む茶屋で休憩している弥次さんと北八です。由比の名物といえば、薩埵峠からの富士山の眺望の良さと、サザエの壺焼きなどの磯料理が有名です。その名物のサザエに北八はなぜか指をはさまれて大騒ぎしています。どんなことをしても離さないので、弥次さんに助けを求めました。すると弥次さんは、「めいかをよもう、うたのどくで離すかもしれない」（名歌と迷歌、徳と毒の掛け言葉か？）と、一句ひねりました。

しめつけるあじはあはびの貝ならで
さざいのつぼのふたりしっぽり

【興津】　薩埵峠を越え興津川に差し掛かった弥次さんと北八。ここは冬には仮橋がかけられますが、夏場は歩行渡しが行われます。川越人足の肩車で川を渡る二人ですが、先を行く弥次さんの顔が少しゆがんでいます。どうやら弥次さんは痼気のようで、人足の背中で股間が押され、潰れてしまったと大騒ぎし痛がっているのです。それを見た北八は、水の中にでも落っこちたんじゃないかと冗談を言って笑っています。あまりひどく押されたものだから上の方へつるし上がっていたらしく、揉み下ろしたら元どおりになったとひと安心する弥次さんでした。

きん玉のつぶれたこと、おどろいて
またきも玉をつぶしこそすれ

9 江尻　府中



【江尻】　北八が占い師に手相を見てもらっています。占い師が言うことには、幸せを呼ぶという魚紋の相が乱れており、女性のために心を乱す形が見えるが、衣食住には困っていない手相だといいます。さらに詳しく見て、すっぱり当ててみましょうと占い師。ところが北八は、そんなことを見てもらうつもりでなかったらしく、江戸を発つときにあの世までと言い交した女性が、心変わりでもしていないか見てもらおうと思っただけでした。ともあれ、北八が生活に困っていないという占い師の見立ては大外れでした。

【府中】　女性と一晩過ごした弥次さんですが、明け方になって逃げ出そうとしています。それに気づいた女性が、どこまでもついてゆくぞ、それがいやなら五、六両でも置いてゆけと離しません。しまったと嘆く弥次さん。昨晩、隣座敷で歌う声がよくて、さぞかし美人だろうと思っていたのですが、夜が明けてびっくり。弥次さんが腕づくで離そうとしますが、その女性は弥次さんの褌（ふんどし）をきつく引っ張って離そうとしません。

うつくしいこえをしるべのかさねよき
ついはいかけてきぬ川のふち

10 鞠子　岡部

【丸子】　六部の廻国僧を前後で挟み、行く手をさえぎる弥次さんと北八。六部とは六十六部のことで、大乗妙典六十六部経（法華経）をもって諸国の霊場を巡り一部ずつ経典を奉納して廻る僧のことです。長丁場の旅に飽きたので、うさばらしに茶番でもしようというのです。ふざけてないで、さっさと通せと廻国僧。すると弥次さんが「ほざいたりぬかしたり、袖振り合うも縁のした力持ちまえ修行者どの」と返します。これは、「誠に袖ふり合うも他生の縁とやらいえば、諸国を経廻（へめぐ）る旅の憂さおも晴らし」という歌舞伎の名歌徳三舛玉垣（めいかのどくみますのたまがき）のセリフを引き合いにだしているものと思われます。

【岡部】　弥次さんが女性に投げ飛ばされています。ことの発端は、弥次さんが寝ている女性の上に覆いかぶさったので、首筋をつかまれ投げ飛ばされたのでした。投げ飛ばされたはずみで弥次さんは襖（ふすま）にあたり、隣で寝ていた北八に襖ごと覆いかぶさりました。北八はびっくりして逃げようとしますが、体が動きません。両人とも地震だと思って「くわばら、くわばら」と声を上げています。どうやら、弥次さんが間違って女性に覆いかぶさったようです。

11 藤枝　嶋田

【藤枝】　落馬した弥次さんが馬方に文句を言っています。こんなじゃじゃ馬に乗せやがって腰の骨を折ったではないか。弥次さんが乗ると同時に馬が駆け出したため、止めようと横っ腹を蹴り上げたら振り落とされたのでした。起き上がることができず北八に助けを求める弥次さん。どうやら先を行く女性に気を取られ夢中になっていて振り落とされたのでした。この騒ぎで、女性を見失ってしまった弥次さんでした。

さきへゆく女馬にのりてみまほしと
こがれてこしをぬかすおっこち

【嶋田】　弥次さんと北八の二人は、東海道の難所の大井川にやってきました。ここは歩行渡しや連台越しで川を渡らなければなりませんでした。連台越しの駕籠に乗った女性を見た北八が、どこかの大名の妾だろうといいます。背も高からず低からず、くっきりとした白い肌、柳腰で目元、口元のどこをとっても申し分のない女性を妾にした大名に比べ、自分はどんなに頑張ってもあんなに美しい妾を持つことはできないと羨ましがります。できるものなら生まれ変わって、ありったけの身上を使って美しい妾をもって大往生したいものだといいます。すると、人のことを羨ましがっても仕方がないという弥次さんは、後の連台に乗る十六、七の娘が気になるようです。

12 金谷　日坂

【金谷】　往来の端でふざけている弥次さんをみて馬子が注意しています。どうやら弥次さんは、蛇篭（網に石などを入れた土留め）に足を踏み込んだようです。引き上げようとする北八に、強く引っ張ると足の皮がむけるから、そっと引き上げてくれと頼みます。自ら蛇篭の中へ足を踏み入れて人の世話になるのにうるさいと北八が言うと、弥次さんは沼津の宿で北八が釜の中に落っこちたことを持ち出しました。すると北八は、弥次さんがさっぱりかまってくれなかったことを根に持っていたようです。一服しながら北八は、見物でもするつもりのようです。

【日坂】　座頭の猿市と犬市の二人連れが川を渡ろうとしています。犬市が猿市に早くおぶって川を渡さないかと言うと、たった今おぶって渡したではないかと言い争いになっています。どうやら最初に猿市がおぶって渡したのは犬市にすり替わった弥次さんのようです。催促する犬市に猿市が背中をだすと、これはしめたと今度は北八がおぶさり川を渡ろうとしますが、途中で気付かれて川に振り落とされてしまいます。手足をもがきながら川下へ流れる北八を川から引き上げた弥次さんは、大笑いです。

13 掛川　袋井

【掛川】　さきほど川で出会った座頭の二人が茶屋で酒を飲んでいます。すると、座頭の犬市が酒はどうしたと猿市に問いかけると、猿市はさっきついだばかりだ、こぼしでもしたのだろうと言い争いになっています。そして犬市は、てっきり猿市が一人で飲んだとばかり思い、盃を回せと詰め寄ります。二合の酒がたった二口でなくなったことに猿市は、目が不自由なことをいいことに茶屋の亭主の仕業だと思い込み、銭を払わないといいだします。茶屋で酒を飲んでいる二人に出会った北八が、座頭の飲んでいる酒を盗み飲みしていたのでした。

（狂句）コイツ廻文　かんばんに
　　めしにしめ

【袋井】　茶屋で休んでいる坊主の腹をみて、弥次さんと北八がうわさ話をしています。飯をたらふく食ったとか、孕んでいるかもしれないとか、あの腹じゃ布袋様の代わりが務まるとか言いたい放題。腹が膨れたのはたらふく茶を飲んだせいだろうと弥次さんが一首詠みました。

　こゝに来てゆきゝの腹やふくれけん
　　されば布袋のふくろ井の茶屋

北八はというと、キャン、キャンと犬にほえられびっくりしています。よっぽど普通の鳴き方ではない犬に、ワンとかヒンと鳴けと言っています。しかしよく見ると、北八が犬のしっぽを踏みつけていたようです。

14 見附　浜松

【見附】　弥次さんと北八が茶店で一杯やっていると、突然北八が「アイタ、アイタ」と痛がりだしました。弥次さんが、裸になってふるってみろというので、北八が着物をふるうと大きなアリが二匹落ちてきました。カブトムシのようなアリを見て北八はびっくりしています。踏みつぶそうとするともう一匹のアリが弥次さんの脚絆に潜り込み、今度は弥次さんが食いつかれました。おちおちと飲んじゃいられないと、早々に勘定をして立ち去る二人でした。

【浜松】　浜松で泊まった宿に死霊が出ると聞いた二人は、気味が悪いと怖がっています。小便を我慢していた弥次さんが一緒にやろうと北八を誘います。北八が雨戸をあけると、庭の隅に宙に浮く白いものが見えてびっくりした拍子に後ろへ倒れました。弥次さんも恐る恐る外をのぞいて目を回す始末。この騒ぎに宿の亭主をはじめ皆が駆けつけます。目を覚ました弥次さんがよく見ると、干したままの白襦袢を下女が仕舞い忘れ、それを幽霊と見間違えたのでした。「ゆうれいと思ひのほかにせんたくの　じゅばんののりのこわくおぼえた」と結んでいて、これは一九の「東海道中膝栗毛」にも登場する有名な場面です。

15 舞坂　新井

【舞坂】　舞坂から船に乗り込んだ弥次さんと北八。当時、舞坂と新居の間は今切渡船という船渡しが行われていました。船中で弥次さんの着物のたもとをまさぐる男がいました。不審に思った北八が尋ねると、蛇を見失ったのだといいます。船中大騒ぎとなり捜したところ、板の下でとぐろを巻いている蛇を発見。捕まえた蛇を北八が海へ捨てるよう言いますが、蛇使いの男は捨てられないと答えました。そこで北八が、その男ともども海へ放り投げるというと、男は懐から蛇を取り出して北八に迫るのでした。一九の「東海道中膝栗毛」では、北八の刀の鞘に巻き付いた蛇を刀ごと海へ投げ入れてしまったところ、浮き上げってきて竹光だったことがばれてしまう話になっています。

【新居】　弥次さんと北八は、大凧を揚げている男たちに出会います。遠州地方では江戸時代以降大凧を揚げる風習がありました。どういうわけか、北八が凧の糸に引っ掛かり吊り上げられようとして弥次さんに助けを求めました。これ以上糸が伸びると海の中へ吊り上げられるので、腰をしっかり持つように北八がいいます。しかし、弥次さんは自分まで一緒に天に昇ってしまうからと、北八に笠の手を放して下へ落ちろというのでした。

16 白須賀　二多川

【白須賀】　北八が娘から網をかけられています。どうやら北八が娘のあとをしつこく付きまとっていたからでした。網をかけられた北八は、人を人魚だと思って娘が網をかけたと冗談を言いながら、弥次さんに早く出してくれるよう懇願しています。しかし弥次さんは、北八が娘をからかったからだと聞く耳をもたず、ウサギがキツネを生け捕ったのだと大笑いしています。

恋ならば人目のせきはいとわねど
このあみのめにかゝるくるしさ

【二川】　二川宿のはずれの猿ヶ馬場は柏餅が名物で、歌川広重の「東海道五拾三次之内」にも登場しています。二人は猿に似た顔の茶屋の婆さんに柏餅を買うようしつこく追いかけられています。さっきそこでたらふく食ったからいらない、といっても許してくれません。あまりにもしつこくせがむので、とうとう12文ばかり買ってしまうことに。

きゃっきゃっとわめきてむりにおしつける　さるがばゝあのかしわもちうり

17 吉田

【吉田】 旅籠屋の女が勢いよく駆けてきたところ、とんでもない鼻柱にぶつかってしまい、大笑いしています。それを見ていた北八は、般若の面をした女が天狗の鼻柱にぶつかったと、弥次さんに一首詠んでもらいます。

金ぴらの御利生ゆへかないじんの
戸帳めがけて鼻のめんぼく

江戸時代には金毘羅参りをする行人は、画中にあるように天狗の面を背負っているのが目印でした。金毘羅参りは、伊勢参りと並ぶ人気の旅コースでした。それにしても大きな天狗の面を背負っています。

18 赤坂　藤川

【赤坂】 弥次さんが馬乗りになって尻尾をだせと、北八の尻に手をやっています。弥次さんは北八のことを狐が化けたのだと信じ込んで、捕まえようとしていたのです。痛がる北八ですが、弥次さんはお構いなしに北八の手を後ろに回して縛りあげます。そのうち北八は面白くなって、弥次さんが引っ立てると「ヒヒン、ヒヒン」というと、弥次さんも「ハイハイ、ドウドウ」と答えるのでした。画中には、二人の様子を見つめるキツネがいます。これも一九の「東海道中膝栗毛」に登場する場面です。

【藤川】 駕籠に乗った女性の脇をついて歩く北八。先には年配の女性がいます。どうやら駕籠の女性の母親のようです。北八は年配の女性から見つめられたのをいいことに、何と声をかけようか思案し、駕籠について歩いていたのでした。芝居の話、食べ物の話、天気の話、つまずいて転べば助けて声をかけることもできるが、といろいろ考えているうちに、その親子は脇道にそれて行ってしまいました。

19 岡崎　池鯉鮒

【岡崎】　弥次さんと北八は三河万歳師の家族に出会い、旦那と女房の会話を聞いています。万歳師の女房が、江戸へ行っていた旦那の帰りがずいぶん遅いので待ち侘びて寂しかったといいます。一方、万歳師の旦那は、さぞ帰りを待ったであろう、江戸で金持ちの娘や後家に大変もてたと自慢話をしています。すると子供が、父親に土産はないのかとせがみ、さらに続けてとさまがいない間におっかあーが…といいだしました。すかさず父親がどうしたと尋ねると、その子供は、土産をくれないのなら話さない、と答えるのでした。

女ぼうは内でていしゅをまっちゃらこ
としたちかへるみかわまん才

【池鯉鮒】　雨がしょぼしょぼと降る夜道を弥次さんと北八は、池鯉鮒の逢妻川にやってきました。逢妻川で河童が出ると聞いた二人は、恐る恐る歩いています。すると、向こうから白いものが見え、だんだんと提灯が近づいてきました。提灯越しに見えたのは、手に豆腐と徳利をもち、大きな傘をさしている小さな小僧でした。二人は、豆腐小僧の河童の化け物かタヌキかムジナかと驚き、腰を抜かしながら逃げていきました。

しりご玉ねらう子ぞうと思いしは
かっぱやろうの北の目ちがい

※しりご玉（尻子玉）は、肛門の所にあると想像された玉で、河童が好んで引き抜くとされていました。

20 鳴海　宮わたし

【鳴海】　寺の前で顔に墨を塗られた弥次さんと北八が、僧たちに追い払われています。どうやら出来たばかりの寺の柱に弥次さんと北八が、張札・落書無用とあるのに、ろくでもない落書をして罰として顔に墨を塗られたのでした。柱には「神田八丁ほり　弥二郎兵衛　きたはち　同行二人」と見えます。

【宮】　宮（熱田）へやってきた弥次さんと北八。ここは、桑名へ向かう海上七里の船渡しの渡船場がありました。船で北八は昔のことを思い出したようです。旦那の用で木更津で船に乗った時、沖合で急に腹が痛くなり、舳先で尻をまくって用を足そうとました。すると俄かに大きな波がきて海へ落っこち、一斗五升ばかりの水を飲んだというのでした。この話を聞いた弥次さんが、泡を食らったり水を食らったりしてさぞかし腹が一杯になっただろうというと、北八はたらふく飲んで酔ってしまったと答えました。

うみおとすけがあやまちはなみのうえ
日だちもはやき風のはらみ帆

21 桑名　四日市

【桑名】　桑名といえば焼き蛤が有名です。「その手は桑名の焼き蛤」（その手は食わないの意）の洒落言葉としても良く知られています。食い意地のはった二人ですが、弥次さんが大蛤を取ろうとして指を挟まれています。そんな弥次さんを見た北八は、よくやけた小さな蛤をとるのだといって蛤を取りますが、どうみたって大きな蛤に手を挟まれている北八でした。「手を食われた」北さんでした。

はまぐりに手をはさまれてしんきろう
ふきだすほどにわらわるゝなり

【四日市】　北八が四日市の宿で何かやらかしたようで、宿屋の亭主が怒っています。手前には菰にまかれた地蔵が横たわっています。お寺に奉納するため新しく建立した地蔵でしたが、鼻が壊れています。たまたまそこにいた北八が壊したのではないかと疑われたのです。問い詰められた北八は、小便に行こうとしてうろうろしていただけだと答えました。しかし実は夜這いを行おうとしていたのでした。

はいかけじぞうのかおもさんどがさ
又かぶりたるしゅびのわるさよ

22 石薬師　庄野

【石薬師】　焼きめし屋で食事をする二人ですが、北八が持つコンガリと焼けた美味しそうな焼きめしが犬にとられました。今度はとられないと意気込みましたが、また犬にとられてしまいます。すると北八は、やきめしを五、六個注文し、今度飛びついたら皮をはいで太鼓にしてやるぞと意地になっています。それを見た弥次さんが、いい加減にしろ、相手は毎日とるのが商売だとたしなめますが、北八は犬が取りそこなうまであきらめませんでした。

【庄野】　道端で作業をしている女性に弥次さんが何か話しかけています。弥次さんは、あなたのような美しい娘を女房にしたいが、ほかに美しい娘はいないかと尋ねます。娘がほかへ行って聞いてくれと答えると、弥次さんは、ほかになきゃあなたでもいいと。そして、年はとっているが気立てがよく女性にも優しいし、江戸へ行けば金もあるから親たちに苦労はさせないと自ら売り込みを始めました。そんな弥次さんを北八は、また「庄野こりもなく（性懲りの洒落）」と冷めた様子でみています。

23 亀山　関駅

【亀山】　留女が北八を引っ張り、宿に泊るよう催促しています。関まで行くから離せと北八は言いますが、これから関まで行くと夜になると留女が答えます。それでも北八が行こうとすると、留女が北八の帯をもって引き戻します。帯が解けるのも知らず北八は弥次さんの後を追って駆けだしました。すると留女は帯を引っ張りながらはやし立てると、思わず北八も浮かれて踊り出しました。

人まねのたびじはさるに三本も
たらぬくり毛のほんの弥二馬

【関】　雷が鳴る中、大雨が降りだしました。二人は一丁ばかり先にある茶屋まで駆け出しました。北八は、合羽（河童の洒落か）を着ている弥次さんはいいが、自分はずぶぬれだといいます。幸い米俵を見つけた北八はそれを拾い上げ、身にまとうと一目散に駆けだしますが、五、六間先で動かなくなりました。北八は訳が分からず、離せ、離せと騒いでいます。どうやら俵から伸びた縄が、臼の下に挟まっていたのでした。

ふりだしてこころもせきにせきのしゅく　とおりすぎたるなつのあめあし

24 坂の下　土山

【坂下】　弥次さんは、自分は有名な書家だと偽り、旅籠の屏風などに好き放題に落書をして旅籠の亭主から叱られています。しかし弥次さんは筆跡の優れたのは素人じゃわかりゃしない、自分が書くのは筆法を第一とするから字の良し悪しじゃないと、まったく悪びれる様子もありません。しかも、見る人が見ると中国の有名な書家にも劣らず今に高額になるでしょう、銭にならずとも手拭き紙にはなりましょうといいたい放題。すると宿屋の亭主がよっぽど平気なお方だというと、弥次さんは平気じゃない、「平家の侍、悪筆兵衛」と答えました。悪筆兵衛は平家に仕えた悪七兵衛（平景清）で、平気と平家も掛け言葉になっています。

【土山】　「坂は照る照る、鈴鹿は曇る、あいの土山雨が降る」と唄われほど土山は雨の多いところでした。歌川広重も「東海道五拾三次之内」で雨の中を行く大名行列を描いています。弥次さんと北八の二人も、雨に降られるなか石部宿まで急ぎます。二人はうつむき加減で黙々と歩いているように見えます。いつもふざけてばかりの二人でも落ち込むこともあるのでしょうか。いいえ、どうやら雨に降られたことに掛けて女性に振られた話をして、相変わらず冗談を言い合っているようです。

草も木もめだす五月のかぜすぎて
あめつちやまのめぐみとうとき

25 水口　石部

【水口】　弥次さんと北八が吹き矢の屋台で遊んでいます。的に当たるとからくり仕掛けの妖怪が動き出す趣向。北八が矢を吹くと、鐘の中から般若が飛び出し驚いています。今度は弥次さんが吹くと、一つ目小僧に石灯籠の化け物が出てきました。二人が吹き矢に夢中になっている間に路用の入った風呂敷包を盗まれてしまいました。

【石部】　二人が泊まった宿で、弥次さんの部屋を若い娘が覗いています。若い娘の寝床に忍び込んだはずの弥次さんでしたが、どうやら間違って母親の寝床に入ってしまったようです。弥次さんに先を越されてしまった北八も行燈を下げてきたらこのありさまに出くわし、互いにびっくり仰天。

むすめぞとおもいちがいし六十の
ばゝもむかしはしんぞきみなら

26 草津　大津

【草津】　草津の矢倉の立場では「姥が餅」が有名でした。その姥が餅を弥次さんが泡食って食べて喉に詰まらせ、すべて吐き出しています。弥次さんは五つ食べたといっていましたが、口から吐き出したのは七つで、茶屋の老婆もあきれています。それにしても欲の深い弥次さんでした。

すきはらにあわてゝのどへからみもち
はしのたしにはならぬくるしさ

【大津】　たらいから飛び出した大きな鯰を弥次さんが押さえつけています。かば焼きにして食べようとでもいうのでしょうか。ところで、弥次さんは手に瓢箪を持っています。これで鯰を押さえつけようとしていますが、どういうことでしょうか。ここ大津は江戸時代初期から制作された民俗画の大津絵で知られたところで、旅人の土産物として有名でした。この大津絵の中に瓢箪で鯰を押さえつける絵があり、鯰絵のもとになったともいわれています。戯作者の魯文がそのことを知って登場させたと思われます。

はねというぬらくらものよひょうたんで　おさへかねたるなまずいっぴき

※文中に、鯰がはねるのは瓢箪で押さえられるが、ぬらくらもの（なまけもの）は押さえられない、とあります。

参考２　「増補東海道膝栗毛」浜松の場面の挿図

慶応３年（1867）から明治３年（1870）にかけて「東海道中膝栗毛」を真似て出版された全７冊の読み本。狗々山人が文を書き、月岡芳年が絵を描いています。狗々山人は幕末から明治にかけての戯作者で初代笠亭仙果。本名は高橋広道。月岡芳年は歌川国芳の門人で、落合芳幾とは同門。
上図は、びっくりした２人が腰を抜かしている場面で、増補版ではこのほか、気絶した弥次さんが北八に介抱されている図の２図が描かれています。

参考１　十返舎一九「東海道中膝栗毛」浜松の場面の挿図

物干の襦袢を幽霊と思いびっくりして、気絶した弥次さんが北八に介抱されている場面を描いています。

参考３　歌川広重「膝栗毛道中雀 東海道浜松泊」

このシリーズは、「京都大仏殿」「雲津の宿はつれ」「浜松泊」の３点のみです。十辺舎一九の「東海道中膝栗毛」の浜松宿での話をもとに、物干の白い襦袢を幽霊と思い、弥次さんと北八がびっくり仰天している場面を描いています。狂歌は「ゆふれいと　おもひの外にせんたくの　しゅはんの糊かこわくおほへた」

展示品リスト

No.	展示資料名	年代	形態・寸法（縦・横）		
1	東海道中栗毛彌次馬　序文	万延元年	縦大判	38.0	26.2
2	東海道中栗毛彌次馬　発端住家	万延元年５月	縦大判	37.5	25.8
3	東海道中栗毛彌次馬　程ヶ谷・戸塚	万延元年閏３月	縦大判	37.3	25.8
4	東海道中栗毛彌次馬　藤沢・平塚	万延元年６月	縦大判	37.6	25.8
5	東海道中栗毛彌次馬　大磯・小田原	万延元年	縦大判	37.3	25.6
6	東海道中栗毛彌次馬　箱根・三島	万延元年	縦大判	38.1	25.6
7	東海道中栗毛彌次馬　沼津・原の駅	万延元年	縦大判	37.8	25.7
8	東海道中栗毛彌次馬　由井・興津	万延元年 10 月	縦大判	37.9	25.5
9	東海道中栗毛彌次馬　江尻・府中	万延元年 10 月	縦大判	38.5	25.9
10	東海道中栗毛彌次馬　鞠子・岡部	万延元年６月	縦大判	38.0	25.5
11	東海道中栗毛彌次馬　藤枝・嶋田	万延元年 10 月	縦大判	37.5	26.0
12	東海道中栗毛彌次馬　金谷・日坂	毛万延元年５月	縦大判	37.3	25.5
13	東海道中栗毛彌次馬　掛川・袋井	万延元年７月	縦大判	37.8	25.6
14	東海道中栗毛彌次馬　見附・濱松	万延元年５月	縦大判	37.8	25.9
15	東海道中栗毛彌次馬　舞坂・新井	万延元年６月	縦大判	37.9	25.4
16	東海道中栗毛彌次馬　白須賀・二多川	万延元年 10 月	縦大判	38.0	25.5
17	東海道中栗毛彌次馬　吉田	万延元年	縦大判	18.6	24.3
18	東海道中栗毛彌次馬　赤坂・藤川	万延元年６月	縦大判	37.9	25.6
19	東海道中栗毛彌次馬　岡崎・池鯉鮒	万延元年８月	縦大判	38.0	26.1
20	東海道中栗毛彌次馬　鳴海・宮わたし	万延元年７月	縦大判	37.2	25.6
21	東海道中栗毛彌次馬　桑名・四日市	万延元年５月	縦大判	38.0	25.8
22	東海道中栗毛彌次馬　石薬師・庄野	万延元年 11 月	縦大判	37.0	25.6
23	東海道中栗毛彌次馬　亀山・関駅	万延元年６月	縦大判	37.6	25.8
24	東海道中栗毛彌次馬　坂の下・土山	万延元年 11 月	縦大判	37.9	26.2
25	東海道中栗毛彌次馬　水口・石部	万延元年 10 月	縦大判	37.7	25.4
26	東海道中栗毛彌次馬　草津・大津	万延元年５月	縦大判	37.7	26.0
参考１	十辺舎一九　東海道中膝栗毛　全 18 冊	享和2～文化11年	中本		
参考２	増補東海道膝栗毛　全７冊	慶応3～明治３年	中本		
参考３	歌川広重　膝栗毛道中雀　東海道浜松泊	（天保初年頃）	横大判	23.5	36.2

新居関所史料館

2021年1月3日発行

静岡県湖西市新居町新居1227-5
TEL・FAX 053(594)3615